

## 〔兎園小説十二集〕犬猫の幸不幸

いぬる十一月廿三日、内藤新宿なる旅籠屋橋本總八が家にて、河豚を料理ける時、その骨腸を家のうちなる子犬と家に飼うたる猫と食ひけるに、忽口より白き淡をふき、くるくとめぐり、七轉八倒して、いとくるしげに見えし程に、犬はそのまゝ死ぬ、猫は座敷へよろめき上りつゝ折ふし座敷の腰張をせんとて、つのまたといふものを煮て、盆に入れて置きたるを、此猫そのつのまたを啖ひけるに、見るが内にくるしみの氣色うせて、平日のごとくになりけり、これつのまたは魚毒を解するものなるか、それを考りて猫の食ひけるか、又はくるしさのまゝに何となくくらひしか、自然とつのまたの功によりて魚毒を解したるにや。

〔燕石雜志〕近屬醫師のみづから本草に誇るものありけり、患者禁好物を錄し人を遣してこれを問ふに、そのうちに鰻フカあり、河豚の和訓をフクといふ、俗人音を借て鰻に作る、醫師これを考らず、讀てアハビとして、これを許せしかば、患者歡びて、やがて河豚を食ふ程に、その夜暴に死せりといふ。

## 〔梅園日記〕二 河豚

秉穂錄云、石林詩話に、河豚方出時、一尾直千錢、然不多得、非富人大賈預以金噉、漁人未易致、二月後日益多、一尾纔百錢耳と、今江戸にてかつを、買ふと同じ、松陰快談云、東都人嗜松魚、其出在春末夏初、始出、一尾直萬錢、都人爭買之、中下之戸最先食之、以晚食爲恥、傾囊典衣、惟恐不得也、至四五月之際、出益多、一尾纔百錢耳、石林詩話曰云々、是彼此相似者、河豚有毒、往々殺人、松魚亦有微毒、其不鮮者能中傷人、鮮者亦不宜多食也、按するに、爾雅翼に観今之河豚、其出有時、率以冬至後來、每三頭相從、號爲一部、疎云得一部、典一部、言烹和所用多也とあるも、亦快談の典衣といへるに似たり、又江戸の卑賤の者、河豚の鐵炮といふは、あたれば即命を失ふとの意なるべし。